

28P-am471

日向薬事始め（その9）日向出身の、華岡青洲および賀川玄悦（賀川流産科）門下生とその周辺

○山本 郁男^{1,2}、宇佐見 則行^{1,2}、程 炳鈞^{1,2}、岸 信行^{2,3}（¹九州保福大、²九州保福大薬QOL研究機構、³宮崎・富高薬局）

【目的】演者らは、これまで江戸時代、日向国における医薬に関連する歴史的人物をとりあげ報告した。¹⁾日向における医祖として渡辺正庵(1631-1699)が挙げられるが、それ以後この遠隔の地である日向から京都、大坂、江戸、長崎へと医学の道を極めんと多くの若人が上京した。今回、紀州の華岡青州および京都の賀川玄悦門下生をとりあげる。

【華岡青州門下生】弓削隆助、中村俊英(2名)は平山本塾「春林軒」。由地春溪、井上元達、木脇道隆、大館尚平(4名)は大坂分塾「合水堂」に学んでいる。しかし、各個人に関する文献はほとんどない。ただし、木脇道隆は大坂、緒方洪庵の「適塾」にも入門している。【賀川玄悦門下生】この賀川流産科の下に学んだ日向の若者として桑原惟親のみがいる。惟親は1777(安永6)年、延岡の北、島浦に生まれ、父と共に東郷より北郷に移住した。幼少より医学の志があり、初め豊後の佐藤玄圭、後に京都の賀川玄悦の子、賀川玄吾、さらにその子、賀川満室(貞)(蘭斉)に学ぶ。内科外科に通ずるも特に産婦人科に精しい。帰国後開業、蘭斉の発明した「探頷器」を用い、門前市を成すの盛況であったという。著書に「産航」がある。1848(嘉永元)年71歳で没。しかしながら、不思議なのは賀川流産科に学んだ者は、この桑原惟親のみで、他の若者の名を見ない。恐らく惟親があまりにも偉大かつ有名であったので、彼に続く者が多くありながら、歴史上に残っていないと考えられる。墓は飢肥、大竜寺跡、願成就寺にある。【文献】山本他、日向薬(くすり)事始め(その8)、日本薬史学会2009年会(金沢)、講演要旨集、p28(2009)